

著名な卒業生

〈特 集〉 中学第1、10回卒業生

著名な同窓生については、すでに『九十年史』『金山麓』、やまざる流れ」や本誌既刊号等に載っているが、それらを未見の若い人たちのことも考え、ここに再登場頂く。とりあえず今回は中学第一回、第十回の方々。著名といった場合、いろいろのご意見もありだろうが、著者の独断をお許し願いたい。遺漏・疎略の点については事務局を通じてご教示頂きたい。

注①卒業回数について。当分は中学卒業の方々なので、単に〇回と記す。

②敬称について。同窓生ご本人のみ「氏」を付し、他の方々については略させて頂く。

③町村名について。当時の呼称（合併後の現在と異なる）を使う。

あえて古風な言葉を使ったが、

刀圭界

刀圭とは薬を盛る匙、刀圭界とは医療・医学界のことをさす。太田の本島家は代々医療を家業としたが、第九代自柳（隠居後は柳翁）とその養嗣子第十代自柳は太田中学創設の功労者であった。十代自柳の養子となった赤尾一六（1回）は年少時より秀才のほまれ高かったが、自柳長女竹子と結婚し、本島一郎氏となった。第二高等学校、東京帝大医学部（当時は帝大医科大学と称したが現在の学部名で記す。以下同じ）を卒業し、整形外科を専門として大正六年より新潟医学専門学校（のち新潟医科大学）の教授となり、昭和十一年には学長に就任した。氏を慕って新潟医専・医大に進んだ太中卒業生も多い。昭和十九年より戦後にかけては熊本第五高等学校校長を務めた。

断・治療の権威として全国的に名を知られた人が岡治道氏（8回）であった。氏は太田町の医師岡文造の次男。第一高等学校、東京帝大医学部に進み、卒業後は同大学病理学教室、結核予防会結核研究所等で、一貫して肺結核の早期診断・治療に取組んだ。集団的なツベルクリン検査、陰性者にはBCG接種、疑陽性者・陽性者にはX線撮影、赤沈検査、喀痰検査といった診療体系の樹立・普及に岡氏の果たした功績は大きい。やがて昭和二十一年に東京帝大医学部教授に就任、同二十七年に退官して名誉教授となった。



本島柳之助氏



岡 治道氏

氏をめぐるエピソードを二つ。一つは昭和二十八年、昭和天皇の弟宮・秩父宮のご遺体解剖にあたり執刀したこと。宮は自身が結核で闘病したため、自分で望んだことではあったが、皇室史上前例のないことであった。二つは秋田県由利郡笹子村（現島海町）の結核予防・治療のため、昭和二十一年より十年間の長きにわたり、同村のすみずみまで訪れたこと。結核撲滅の父、救村の恩人として昭和三十年には立派な顕彰碑が建立され、その功績が讃えられている。

本島家の第十一代本島柳之助氏（9回）は十代自柳の長男であったが、当主としてはやや異色なところもある。第四代以来例であった襲名を好まず生涯柳之助で通した。文学を好み太中からは早稲田大学文学部に進み、軍隊生活の経験もあったが、周囲からの勧めにより東京医学専門学校（現東京医大）に進学したのは、太中卒業から九年後のことであった。卒業後は順天堂病院外科、慶応病院放射線科で研究を積み、大正十五年から昭和三年にかけてスイス、ドイツ等で先進医学を学んだ。

帰朝後慶応の放射線科講師、教授に就任した。以後二十年余、肺結核、胃癌、気管支炎、脚気、骨

肉腫などの病気につき放射線利用等の研究を次々に発表した。また東京医大教授、日本医学放射線学会会長などの要職にあって後進の指導にあたった。東京と太田とを往復し、病院経営のかたわら、太中校医のほか地元教育関係での貢献も大きかった。

政・官界

明治・大正・昭和期を通じて、帝国議会・国会に進出した同窓政治家となると意外に少ない。東毛政界の第一人者といわれ、田中正造の跡を継いで鉅毒問題をひききりて衆議院に出、明治・昭和期の代議士であったムトキンこと武藤金吉は休泊村であり、太中との関わりも深かったが同窓ではない。

ところが大正十三年の第十五回総選挙では、同じ休泊村龍舞出身の武藤七郎氏（1回）が立った。同氏は四年修了で四高・東京帝大に進み、正式な卒業ではないが第一回と同級である。選挙に先立ち同窓会役員百八十余名が城見館に集まり、会を挙げて七郎氏を支援することを決議した。一方ムトキンを支持する同窓生有志はそれに

おさまらず会長である上岡校長に抗議した。上岡校長は同窓会の名を両派で勝手に使うなら会長を辞任するとして両者を戒めたと当時の新聞は伝える。結局ムトキンが当選、七郎氏は次点にとどまったが、次の第十六回総選挙では二人並んで当選、かくて同窓初の代議士が誕生した。

奇しくもその頃、衆議院書記官

長であったのが中村藤兵衛氏（2回）。氏は太田町二丁目の太田家の産。三丁目の弁護士中村勘蔵の養子となり、六高から東京帝大法学部に進んだ。会計検査院を経て衆議院書記官となり大正十二年八月に書記官長に就任し、昭和五年四月まで在任した。「憲政の常道」といわれた政党政治興隆期にはば一致する。戦後の昭和二十一年三月、氏は勅選により最後の貴族院議員に列せられ、日本国憲法の制定に参画した。

やがて政界引退後太田に戻った



中村藤兵衛氏



福井 盛太氏

氏を地元の人たちは御輿に乗せずにおかなかった。太田は昭和二十三年五月に市制施行となり、初代市長には太田町長成田作兵衛（15回）がそのまま就任したが、翌年二月に初の市長公選が行われ、候補者三人中、中村氏が圧倒的な得票で当選した。またそれに先立つ昭和二十三年五月一日に発足したわが金山同窓会の初代会長にも推戴されていた。惜しいかな健康上の理由もあって昭和二十四年八月に市長を辞任し、同年十一月に六十七年の生涯を終えた。

法曹界の第一人者から政界入りした人物に福井盛太氏（4回）がいる。旧館林藩士の長男に生まれ、太田に五年間下宿して中学に通った。二高から東京帝大法学部を卒業、弁護士の道に入り、大正十二年、丸ビル内に福井法律事務所を開き、同年第一東京弁護士会を創設し活躍した。「丸ビルの福井事務所」は同窓生の東京ステーション

であった」（中村藤兵衛氏）といわれたが、同窓後輩の面倒見がよかったことで有名である。

戦後法曹一元化の動きの中で昭和二十一年六月、氏は弁護士界のチャンピオンとして検事総長の大任に就き、五年間重責を担い、昭和電工事件等を指揮した。退官後は初代プロ野球コミッショナー、第一東京弁護士会会長となり、昭和二十七年総選挙では太田・館林を含む群馬第二区より立って当選し、以後三期代議士を務めた。

強戸村の岡部周治氏（8回）は戦前須永好らの指導する農民運動が活発な時期においては、地主会側としてそれと対決する立場にあり、同村長にも選ばれているが、戦後は日本社会党に属し、昭和二十七年総選挙には当選し、福井氏と並んで二人の同窓代議士が生まれた。

太中の創立期に多額の寄付をした篤志家として大塚久右衛門（穀物肥料商）と並び渋沢金蔵（質商初代太田町長）の名が挙げられるが、その嗣子渋沢直一氏（襲名して金蔵、9回）は東京帝大を卒業して後に地元に戻って実業に従事

し、太田織布、新田銀行、上毛実業銀行などの重役を務め、葉住利蔵の創設した金山図書館の館長でもあった。当地方を代表する多額納税者として貴族院議員に選ばれ、昭和七年より十五年間在任した。さきに挙げた中村藤兵衛氏亡きあと、第二代金山同窓会長となつたのは、旧鳥之郷村出身の天笠清氏（7回）であった。氏は長く群馬県庁職員を務め、商工課長などを歴任したが、太田近辺の地方政治の諸問題の解決、推進にあたり、陰に陽に調整的な役割を果たし、その功績はいわゆる政治家以上だといわれた。同窓会長を二十年の長きにわたって務めたゆえにもその辺にあったことであろう。明治・大正期は中学を出るとそのまま農業のほか実業に就き、地方の政治・経済のリーダーとなる人が多かった。例えば町村長は軒並みといつていいほど太中出身者が占めていた。一々十回卒業生



天笠 清氏

で両毛地方の町村長に就任した人は同窓会名簿に載っているだけでも二十人ほどおられる。

実業界

実業界、特に商工業について見ると、明治期の卒業生は後代にくらべればこの方面に進出した人は少ない。しかしユニークにして顕著な業績を持つ方がいる。

九合村出身の竹内孝一郎氏（6回）は素封家の長男として地主農家を継ぐ命運にあったが、向学の念やみがたく、二高から東京帝大理学部実験物理学科を卒えた。大正五年、奇しくも尾島町出身の中島知久平海軍機関大尉が海軍を離れ、尾島町に飛行機研究所を創



竹内孝一郎氏

設したその前年であった。

大正八年から十年にかけては米国に留学し、マサチューセッツ工科大学（MIT）では修士課程で航空学科を専攻した。帰朝後も一貫して航空機技術部門を進み、昭和十一年に退官後は、請われて中島飛行機に入り、太田製作所研究部長に就き、昭和十五年に海軍機専門工場として発足した東洋一大工場、小泉製作所に移り、総務部長（のち教育課長兼任）となり、その後副所長と呼ばれた。

その小泉町出身の真下（旧姓宮永）菊五郎氏（7回）は自動車業界において実績を積み、群馬合同バス、のち群馬バス（株）の社長となり、県内における旅客運送業の第一人者であった。また氏は博覧強記の人で、校史を編む上に貴重な資料提供をして下さった。

菲川村出身の高野猶次氏（9回）も異色な経歴を持つ。東京帝大工学部に学んだ電気を専門とするエンジニアで、小田急電鉄（株）に入り、常務取締役・技師長にまで進んだが、戦後郷里に戻って帰農し、地区の農協役員になった。昭和二十三年五月、太田市制施行を前後し



高野 猶次氏

て、大型合併による太田市農協が発足したが、その初代組合長理事に推され、昭和三十九年まで十六年間、辣腕の名組合長ぶりを発揮した。

やがて太田地方の様相を一変させた「飛行機王」中島知久平（尾島町出身）自身は太中出身ではないが、彼の弟三人は兄の仕事を助け、特に昭和五年、知久平が政界に進出した後は、弟たちが社運を盛り立てた。その弟の一人中島門吉氏（10回）も中島飛行機（株）の取締役、中島商事（株）の社長となって活躍した。

干城界

干城とは楯と城、国を守る武人の意味する。明治四十四年に三浦菊太郎校長の発案で、陸海軍将校（予備役等を含む）の同窓生による「干城会」が発足し、「干城」という会誌も発行された。その会頭は三浦校長であったが、会長と

なったのが当時陸軍大尉の川岸文三郎氏（1回）であった。

氏は尾島町の出身、第二回の入学だが成績優秀により「飛び級」で一回生と並び、さらに四年修了で陸軍士官学校に入学した。任官後選ばれて陸軍大学校に進んだ。大正から昭和にかけて陸軍の顕職を歴任し、最後は中将に任ぜられた。注目すべきは大正・昭和天皇二代にわたり、侍従武官を務めたことである。侍従武官とは陸海軍の秀れた将校が天皇に近侍するという制度で非常な名誉とされた。在官中十回ほど母校または太田町を訪れ、講演などを行っている。

川岸氏と並んで語られる人に伏島忠雄氏（1回）がいる。やはり第一回生中の秀才といわれた人で太中より千葉医学専門学校（現千葉大医学部）に進み、卒業後は海軍軍医に任官した。海軍省医務局管下の各部署を歴任し、軍医としては最高位の軍医中将に任ぜられ、



川岸文三郎氏

最後は横須賀海軍病院院長兼横須賀鎮守府軍医長を務めた。

なお同じ第一回生で陸軍士官学校に進んだ人に強戸村出身の須永城一郎氏がいる。任官直後に日露戦争に従事し、若くして明治三十七年七月に戦死した。同年十月、卒業生最初の戦死者として須永少尉の学校葬が行われた。同氏は後の農民運動家・代議士須永好の叔父である。

やはり強戸村出身の小暮軍治氏（9回）は海軍兵学校を出て任官後海軍大学校に進んだ。戦前の代表的な戦艦陸奥の艦長など海軍の要職を歴任し、終戦時には海軍中將、第二十八航空戦隊の司令官であった。

教育界

太中から群馬県師範学校等を出て小学校訓導になった人、高等師範学校等を卒えて中等学校教諭になった人はまことに数多い。校長そのほか教育界の重責を担ったり、さらには中央・地方の政界、実業界に転進したりした人もいる。この時期の卒業生でまず第一に挙げべきは第五代太中校長の湯沢徳



樋口隆次郎氏



湯沢 徳治氏

治氏（3回）であろう。氏は旧大川村（現大泉町）出身、広島高等師範学校を卒業して栃木中学、太田中学（首席教諭）、渋川中学校を経て、大正十四年より昭和八年までの八年間、母校で采配を振った。校長のかたわら修身と専門の数学を十数時間担当し、剛毅にして緻密な指導ぶりは、当時の生徒たちに強烈な印象を与えた。その後高崎中学・前橋中学の校長を歴任し、戦後は公選の県教育委員に選ばれ、永く母校の発展を見守った。

また太田町出身の樋口（旧姓成田）隆次郎氏（4回）は、東京帝大文学部史学科を出て米沢中学教諭、初代足利中学校長、宇都宮中学校校長などを歴任した後、大分高

等商業学校（現大分大学経済学部）教授となった。やがて郷里に帰り、推されて太田町長に就任し、昭和十三年十月より二十一年十月までの八年間、戦中戦後の事多い中を在任し、特に戦争末期には群馬県町村長会の大任に就き、大きな体躯をこまめに動かして前橋通いをしたという。

このほか、東京高等師範学校を出て群馬県女子師範学校長となつた天笠義人氏（2回）、東京帝大文学部を卒業し水戸高校教授等を務めた栗原武一郎氏（3回）、教職の後伊勢崎市立図書館長を務め地方史研究家として知られる渡辺敦氏（5回）、青山師範学校を卒え東京・霊岸島小学校の名物校長として聞こえた椎名龍徳氏（6回）、広島高等師範学校出身で桐生高女、桐生女子高校校長、太田市教育長を務めた木村善平氏（9回）、同じく広島高師を出て宇都宮中学校長等を歴任した小林（旧姓栗原）政一氏（9回）、群馬師範出身で境高校校長を務めた里見嘉一氏（10回）ら、教育界にはまことに多士済々である。

（高7回 正田安司）